

<2013年との比較>

2013年8月の加古さんの調査では1kmあたり123例が記録されています。その内訳は、花ではヨツバヒヨドリが最も多く41.5%、昆虫ではハエ・アブの仲間が最も多く53.7%と記録されました。これに対して2022年の8月には1149例がされ、やはりヨツバヒヨドリが最も多く37.6%、昆虫でハエ・アブの仲間が最も多く72.6%という結果でした(図3)。

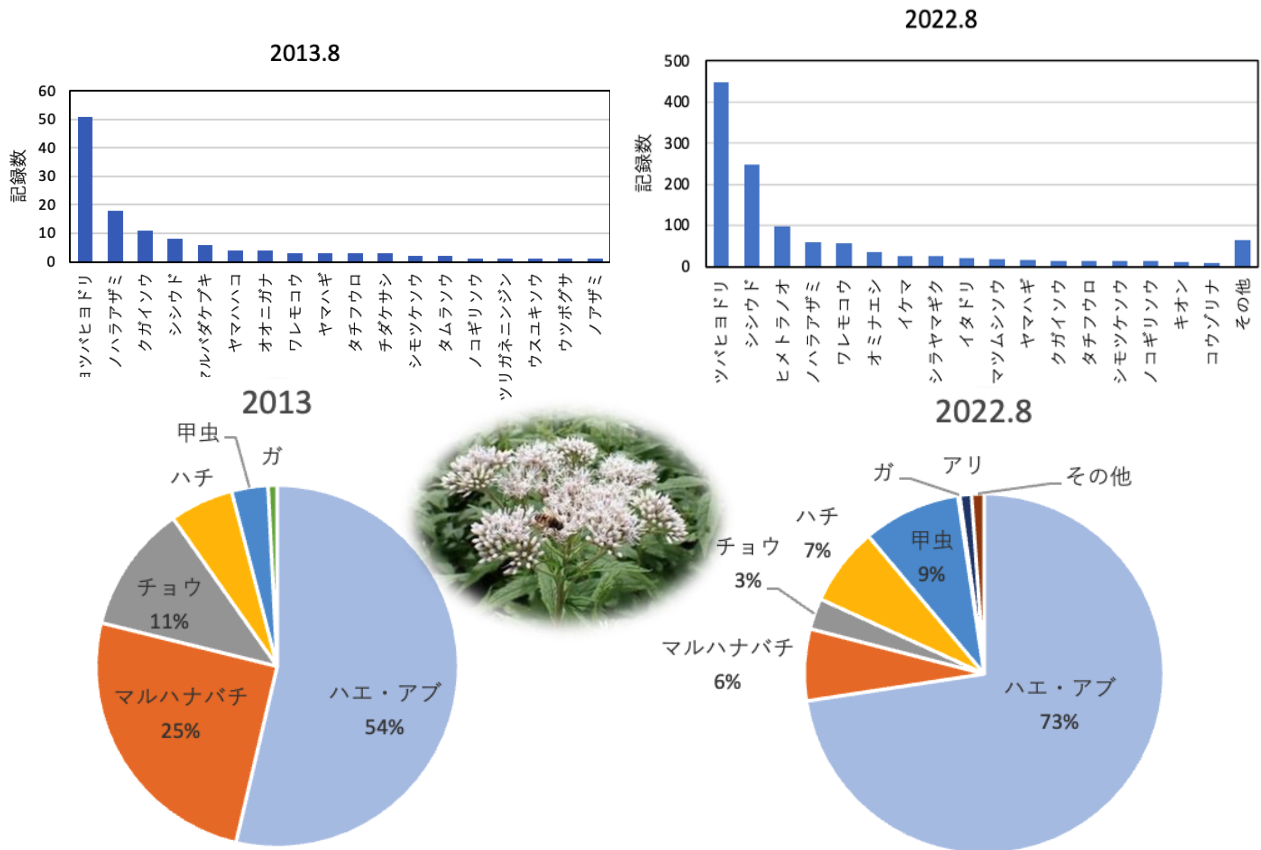


図3. 2013年と2022年に記録された花と昆虫の数

これは2013年の9.7倍にあたり、柵を作ったおかげで、ほぼ10倍の訪花昆虫が記録されたことになります。訪花昆虫が記録された花の数も2013年には18種でしたが、2022年にハエ・アブの割合が増えたのは、ヨツバヒヨドリ、シシウド、ヒメトラノオなど、ハエ・アブが好む花での記録が2022年に多くなったためです。実際、ヨツバヒヨドリは2013年に41.5%であったのに対して、2022年に72.6%に大きく増えました。

柵が設置され、7年後に訪花の記録数がほぼ10倍になったということは、多くの虫媒花が回復し、それに伴ってほか昆虫が集まってきたことを示しています。こうした生き物のつながりが戻ってきたことは、乙女高原の生物多様性が豊かになっていることの一側面と言えます。

※調査には以下の皆様の協力をいただきました。ありがとうございました。

井上敬子、岡崎文子、奥平純太、奥平秀樹、小澤 誠、春日飛鳥、春日龍琉、国武春佳、国武陽子、五味和彦、五味理翔、三枝かめよ、篠原 厚、篠原ふさえ、鈴木辰三、角田敏幸、角田晴美、名越 楓、芳賀月子

